梅新と釜ケ崎

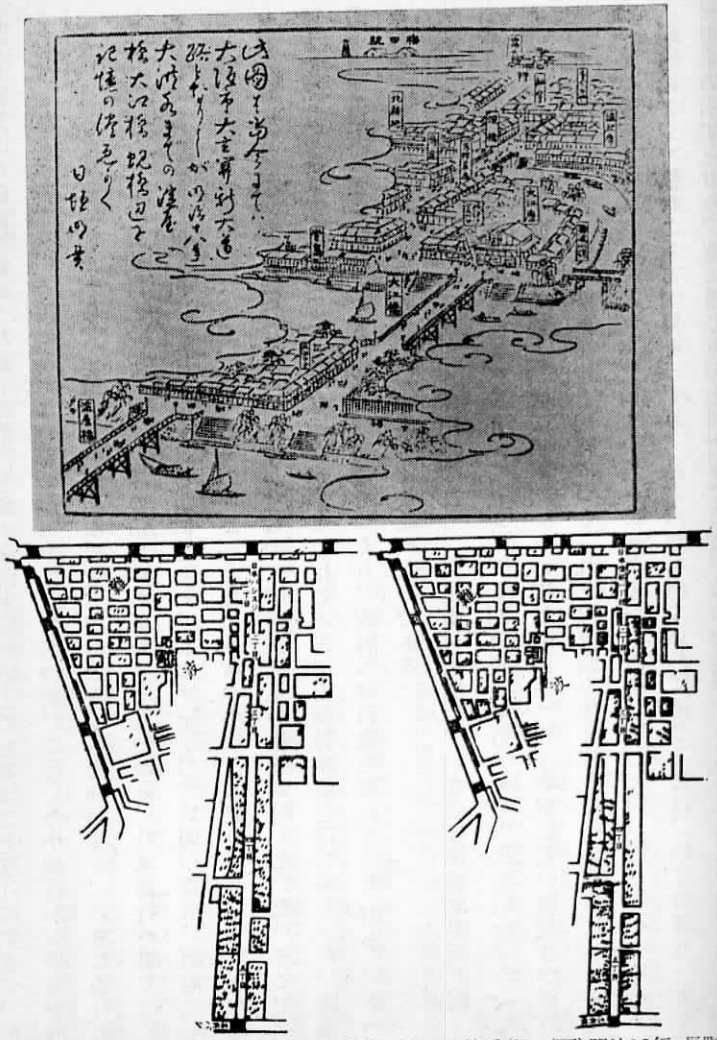
―〝おないどし〟の町―

梅田新道はいまエコン・デッキの道である。地下では大阪市の万国博関連事業第一号の地下鉄二号線・東梅田ターミナル工事がどんどん進み、地上でも「この機会に」といわんばかりのビル・ラッシュ。そぞろ歩きにはしばらく足もとが悪いが、地下鉄開通とともに約束されているのは、なお一層のキタの繁栄だ。その一方で、大都市・大阪にも、まだまだ日の当たらない場所が多い。その第一が――あいりん地区。名ばかりで実体はすこしも変わらない、かつての〝釜ケ崎〟である。

このうきうきしたプロムナードと人生の吹きだまりは、実は明治三十四年に時を同じくして大阪に生まれた〝おないどしの町〟なのだ。そのきっかけは、明治三十三年五月十六日の勅令で「第五回内国勧業博覧会ヲ、明治三十六年三月一日ヨリ七月三十一日マデ、大阪市南区天王寺今宮ニ開設ス」と決定したことにはじまる。

内国勧業博覧会は明治十年、国内の産業を奨励し、輸出貿易をのばそうと内務卿・大久保利通の提唱ではじまった。第一回は東京・上野公園で開かれ、明治十四年の第二回、二十三年の第三回も同じく東京。二十八年の第四回になって、同一場所で開くのは産業振興の目的に反するという意見が出て、ちょうど平安遷都千百年祭が行なわれた京都の岡崎公園で開かれた。

第五回の開催地が議題になったのは、明治三十二年十一月召集の第十四帝国議会。大阪はいち早く名のりをあげた。おりから大阪経済は、日清戦勝景気の反動で明治二十九年から不況のどん底、暗たんたる金融恐慌に襲われていた。日清戦争後の企業ブームの実体は、小銀行から資金を借りて、泡沫会社が続出したというものだった。明治二十八年には国立銀行百三十二、私立銀行六百二十六、あわ



(上)改修前の梅田すてん所―淀屋橋間（篠崎昌美氏蔵）(下)明治19年，長町のコレラ患者発生図（右）と同窃盗犯人逮捕図（左）（いずれも１つの点が１人，碓井隆次著「どんぞこのこのこども」から）

せて七百五十八の銀行があったが、そのうち資本金五十万円以上のものは二十五行にすぎず、そのうえ私立銀行には資本金一万円にみたないものが三十二行もあった。こうした小銀行から資金を借りて多くの会社ができていたから、企業の新設が相次ぐと、銀行の方でも資金がなく、大きな銀行に借りにいった。しかし、大銀行といっても、巨額の預金があるわけでないから、日本銀行へ借りにいく。こうして銀行の貸し出し額は、預金額をはるかに越えた。このブーム を日銀が警戒、明治二十九年夏、金利の引き上げを行なうと、早くもその秋から会社の倒産や小銀行の取り付けさわぎが起こった。これに貿易の不振・凶作などの悪条件が重なって、青息吐息の状態が続いていた。そこで「勧業博で景気直しを……」ということになったが、これはこんどの万国博誘致と同じセリフだ。商業会議所の土居通夫会頭を会長とする誘致期成同盟をつくり、政府へお百度を踏んだ。そのかいあって東京、名古屋のライバルをけ落とし、ようやく決まったのである。

会場予定地は天王寺今宮と堺水族館用地の二つ。天王寺村会場は、いまの阪堺線恵美須町駅―同霞町駅―阿倍野橋交差点―天王寺西門交差点を結ぶ、三十四万三千平方メートル というぼう大な雑草地。茶臼山から海が見える景観と、大阪鉄道（いまの国鉄関西線）天王寺駅に近い便利さが買われたと、ここまではよかった。開催決定と同時につくられた協賛会の住友吉左衛門会長らは「まず道路整備」と、梅田すてん所―船場・島之内―会場への幹線道路建設を計画したが、ここでハタと困った。入場者のアシで悩むのも万国博そっくり。島之内から南の郊外に通じる道は、いまの堺筋一本だけ。その名の示すとおり、堺に通じる旧紀州街道である。これを拡張するより手はないが、会場予定地ま

での間に、デンといすわっていたのが「長町」あるいは「名護町」とよばれた地区。江戸時代から、木賃宿を中心に発生したスラム街である。

いまの堺筋・日本橋一丁目から南の地区。旧松坂屋近くでは東は松屋町筋、西は南海本線のあたりにまで広がっていた。紙クズ拾い、コジキ、人夫、行商人など約三千戸に約一万人が住んでいた。一寸のスキもなくバラックが並び「かんてき長屋」「ハチの巣」「クモの巣」と呼ばれていた。明治二十三年九月、ニセのアメ屋にばけてここにもぐり込んだ日本新聞記者・桜田文吾のレポート「貧天地飢寒窟探検記」があるので紹介しよう。

「日本橋四丁目を過ぎて今宮村というに至り、五百余坪もあらんかと思うはかりの一大塵芥場の前に出てたり、目に余る塵芥堆積して一丘山を為せるに、初秋の烈日光熱を送りて醞醸せしむるものから、に、汚毒の蒸発気は得もいわれぬ悪臭を放ち烟の如く立上る。七八人の男女其塵埃山上に登り、坑夫の金を掘るか如く、熊手をもて其中を掘鑿し、藁屑、木屑、瀬戸屑等掘出すに随ひ撰り分け居る其様真に此世なからの餓鬼道なり……」。

前だれだけのすっぱだかの女たちが、カサブタだらけのこどもを追いまわし、ボロのあわせを着た男たちは一日中、道にへたり込んでいる。一般人が迷い込むと「ヒゲをそるぞ」とおいかけ、金をまき上げる無法地帯。すでに明治十九年、コレラが大流行したとき、長町を発生源とみて移住計画をたてたが、家主、地主側に「ここに新町遊廓を持ってくるなら、協力しまひょ」「道頓堀の芝居小屋を移転してくれ」と逆襲され、くずれてしまったニガイ経験があった。

しかし、こんどというこんどは、この懸案を強行せねばならなかった。理由は博覧会への天皇行幸だ。「道路拡張部分の貧民は強制的に立ちのかせ、天皇行幸のさいは両側の長屋をヨシズでおおってしまおう」。こうハラをくくると三十四年はじめから、さっそく工事にとりかかった。さあ、長町の住民は大あわて。工事人夫にくってかかったり、なぐりつけたりで大騒ぎとなったが「この道を天皇がお通りになる」で抵抗はチョン。あきらめた住民の一部は、大阪鉄道を渡って南へ移住をはじめた。釜ケ崎のはじまりである。

「線路から南は一面の野菜畑やったのが、こんなことになってしもて、さっぱりだすわ」というのは西成区曳船町三五、保護司・藤田安次郎さん（七七）。藤田さんの家は江戸時代からの農家。近くの四千八百平方メートルの土地でネギ、ニンジンを作っていた。「このあたりは〝中野新家〟いいましてな。二階から見ると、天下茶屋の村まで見通しでした。夜になって難波に遊びに行くときはな、一本だけ長町を通らんでもええ道がおきまして、それをいそいそといったもんですわ」。長町を追い出された住民たちは、この畑のなかに掘っ立小屋を建てた。こうして畑が、次第にスラム化する。

さて梅田―淀屋橋間の工事はスムーズに運んだ。当時淀屋橋から大阪駅までが、なかなかスッと行けなかった。橋を渡ると故五代友厚邸へ突き当たり、東へ折れ、菓子の老舗「馬小屋」の角を北へまがると大江橋筋。道幅は五メートル弱、両側には小売り商が並んでいる。木製の大江橋を渡ると、こんどは芝居小屋「大江座」の正面にぶつかるといったぐあい。さらにもう二回、ジグザクをくりかえして蜆橋北詰めのスシ屋「紅宇」の角でもう一度くりかえすと、やっとお初天神に出る。駅へは

境内わきの田んぼのあぜ道を通るか、西へ少し歩いて桜橋筋に出なければならない。とにかく淀屋橋から駅に出るために、少なくとも九回はまがらなければならなかった。だがここでも「天皇がお通りになる」が、しぶる商家にとどめをさした。

こうして明治三十四年は、ツチ音とともに明けた。工事の騒音が高まるころ、会場予定地もにわかに騒がしくなってくる。

博覧会場建設

―〝洋風都市〟出現―

梅田かいわいと長町ではじまった道路づくりが、半分以上も進んだ明治三十四年十一月二十五日、南区天王寺今宮村一帯の会場建設が、いよいよスタートした。なにしろ維新以来最大の工事とあって五分刈りの頭、ハツピにモモ引き、ワラジばきの大工五、六千人が集った。カンナをかける者、トタンを運ぶ者がどなり合い、わめき合い、ものすごい活気だ。テント張りの休憩所には、でっかいヤカンと湯のみ茶わんがうなるほどころがっている。どのヤカンにも「大林組」と書きなぐってあった。

「主催者の農商務省から入札を指名された業者は清水、大倉（いまの大成建設）と、うちの三者でした」と話すのは東区京橋三の一五、大林組相談役・白杉嘉明三さん（九〇）。「大阪には大手の建

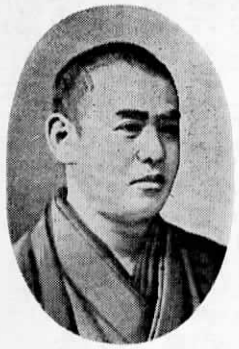
設業者が十四、五軒ありましたが、指名されたのは大林組だけ。主人の芳五郎がみずから上京し、東京の二業者とせり合って落札したのだから、たいしたものでした。工費は本館の三十八万千六十八円をはじめ、全部で三百十八万円（いまの約四十五億円）程度でした」。

大林組が生まれたのは明治二十五年。芳五郎が二十九歳のとき。落ちぶれた塩干問屋の長男だった彼が東京の土建業者のもとで修業したあと、西区靱南通四で二階建ての民家を改造し、ノレンを出したのだ。当時の建設業界にはヤクザや、バク徒の転向組が多かった。それだけに、ナワ張り意識が強く、殺ばつな気風だった。自分のナワ張り内で他人が工事を請け負うと、金をせびるのは当り前のこと。こんな風潮に彼はいどんでいった。「施工入念」「安価提供」などをモットーにした近代的な商法に人気が集まる。

もちろん妨害はあった。しかし、彼の意気込みに共鳴した〝大阪一〟の顔役・野口栄次郎や、堀江の材木商・佐々木伊兵衛の協力が、それを吹き飛ばした。阿部製紙、朝日紡績などの工事を成功させ、メキメキ頭角をあらわす。大林組の名が一躍クローズアップされたのは、明治三十年から同三十八年までの築港第一期工事。この工事を請け負ったときは、業界のせん望とねたみが渦を巻いた。

白杉さんが同組にはいったのは明治三十一年。家業の染めもの業が不振のため、京都府宮津から来阪し、資金作りに走りまわっていたとき、大林組につとめていた同郷の先輩を通じて芳五郎と知り合ったのだ。いっしょに花見にいった南区大江神社境内の湯どうふ屋で、入社を説き伏せられたのも、彼の〝男気〟にまけたからだという。仕事は会計兼庶務係り。そのときの従業員は四十人。それが入

（上）勧業博会場全景（下）大林芳五郎



札のときには、五百人にも達する高度成長ぶり。近代商法で勝ち得た地位を決定的なものにしたのが、勧業博会場建設の落札だった。

一割の保証金を農商務省へ収め帰阪した芳五郎は店がからっぽになるほど人を使いはじめた。建て物の材料はすべてスギとトタン板。しかし、のべ二万平方メートル以上もの建て物だけに、建材の調達がたいへん。まず吉野へ人をやった。スギの丸太を確保するためだ。現地の材木業者数軒と特約したが、木が細く板がとれない。こんどは四、五人ずつのグループを、秋田へ送り込んだ。残留組は大工、左官の手配だ。市内の大工の親方や、下請けの間をかけもわり、やっとかき集めた。日当は五十銭。大阪鉄道天王寺駅近くの敷き地に、ス

ギの丸太と板が山と積まれるうち、十五か月の予定で工事が開始された。

手はじめは会場正門。いまの通天閣のあるあたりから西北向きに、入り口を三つ、中央にドームを作る。その左右には工業館、農林水産館、すべて木造高天井の平屋建て。正門をはいると機械館、教育館が続き、一番奥には美術館。この美術館ははじめ中之島に建てる話もあったが、会場にまとめることになった。博覧会が終わってもとりこわさず、その後三十年間も市民博物館として親しまれた。いまの市立美術館は、この近くに建てられたものだ。二十日、一か月とたつうち、丸天の骨格にヨシズを張り、カベがぬられる。屋根とカベの裏には、トタンをはって防水にした。

「店に残った従業員は十人ぐらい。総出でやったんですな。わたしも一週間おきに見に行きましたが、行くたびに間違えるくらいで、すごい突貫工事でした。設計は農商務省の技師ですが、自分がしたような感激をおぼえました」と白杉さん。三十五年にはいると、工事は急ピッチ。十館と各地方の特別館に加え、イギリス、アメリカなど十三か国の建て物の建設もはじまる。植民地・台湾の建て物もエキゾチックな姿をのぞかせる。

芳五郎も組の建設記念になるものがほしかった。思いついたのは展望台だ。茶臼山の高台、美術館の北側にタワーを作った。五十一メートルの高さで、大阪最初のエレベーターを使う画期的なもの。茶臼山の池にはウォーター・シュートも浮かべる。十二メートルの高さからすべらせるのだ。この電気仕掛けが、のち高麗橋の三越デパートのエスカレーターに利用される。まだある。冷蔵庫も初登場した。貯蔵と見物を兼ねるので、三百平方メートルもの広さ。四万一千円もかけるなど、とにかく近代科学の粋を集めた。

堺では今宮会場の建設と同時に、水族館の建設がはじまった。それまで東京、名古屋などにもあったが、どれも見せ物程度。この機会に、学術的に高いものを作ろうというわけだ。七百二十平方メートルで、基礎にコンクリートを使った半永久的なものだった。両会場に建て物ができ上がり〝洋風都市〟が出現するころ、農商務省は「夜間開場にするので、全館に電気の総イルミネーションをつけよ」と命令する。このわが国初のこころみは、芳五郎を泣かせるが、やがて博覧会最大の呼びものになるのである。

万国博・明治版

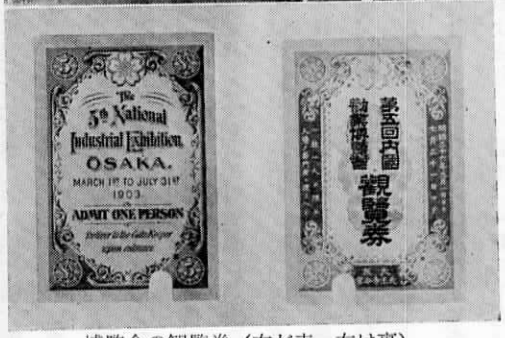
―維新以来の世直し―

「人類の進歩と調和」の日本万国博は、あと三年半たらずにせまったが、その成功を、左藤さんや石坂さんにもおとらず強く願っている一人の庶民がいる。泉佐野市鶴原九二八、府営住宅三八号に住む谷崎喜逸さん（七〇）である。谷崎さんはこれまでも折りにふれて日本万国博協会にいろんなアイデアを提案したが、そのひとつに〝噴水スクリーン〟がある。

会場に大噴水を設け、この水幕をスクリーンにして映画を上映すれば――というのだ。まだだれも手がけたことのない、奇想天外なアイデアだが「技術的にやれなくはないはず」と谷崎さんはいう。また最近、読売新聞に、府水産試験場寝屋川養魚場で完成した水の浄化装置〝エア・レーション〟の記事が出ると、さっそく左藤知事に「これを道頓堀川の浄化に役立ててほしい」と手紙で建言した。万国博を迎えて、大阪を美しくしたいと願う心からで、こうした谷崎さんの協力に、日本万国博協会の新井事務総長も、感謝の手紙を寄せている。

「わたしが万国博にこんなに関心を持っているのも、明治三十六年にこの大阪で開かれた第五回内国勧業博覧会を見て、強い感銘を受けたからです――」。谷崎さんはそのときの観覧券をたいせつに保

博覧会場の全景
（大林組蔵）



博覧会の観覧券（右が表，左は裏）
＝谷崎喜逸さん蔵＝

存している。写真でおわかりのように裏、表ともなかなかこったデザイン。六十三年たったいまも変色もしていない。「紙質の良さもありますが、これにはオヤジの魂がこもっています」という。

この博覧会へ、谷崎さんは、父親・新五郎（昭和二年、五十八歳で死亡）に連れて行ってもらった。当時、かぞえ年九つの小学生。父は西区薩摩堀南之町、いまの立売堀上通二丁目で海産物の荷受け問屋をしていたが、また大阪商業会議所の議員としても、博覧会で大活躍していた。

「まず、建て物のすばらしさに目を見はりました。それに、ものすごい人出。展示品のこまかいことはおぼえていませんが、活動写真や噴水塔がこども心に印象的でした」。観覧券は「記念にしまっときなさい」と父からいわれ、父が座右の書にしていた本の間にはさんでおいた。十二、三のとき上

京、印刷業、ついで炭鉱事業にたずさわり、四年前大阪に戻ってくるまでずっと東京ぐらし。関東大震災やこんどの戦災を受けたが、父親の〝形見〟のこの観覧券だけはふしぎと難をのがれてきた。

勧業博が、谷崎さんにこんなに影響を与えたのも道理。これは、日本で最初の事実上の〝万国博〟だった。勧業博は、国内産業を奨励し輸出貿易をのばそうと、明治十年からはじめられ東京で三回、京都で一回開かれてきたが、この回からはじめて外国勢が参加、英、米、仏、独など十三か国から自動車、カメラ、タイプライターなど近代科学の粋が出品されている。

展示された内外の物産は二十七万六千点。会期は三月一日から七月末までだったが、入場者は五百三十万人にのぼった。それまで最大だった第四回（明治二十八年、京都）が、出品点数十七万、入場者百十三万人だったから、いかにケタはずれのスケールだったかがわかる。開場当日の模様を、大阪朝日新聞はこう伝えている。

「……開門前七分となりしとき、守衛長はチリリンチリリンと鐸（すず）を打振りたれば（数千の）観覧者は素破（すわ）時刻よと色めく間に、一発の午砲は轟き渡りて、其とともに三方一度に入場を許し初めぬ……」。

このとき一番乗りしたのは、京都からやって来た高山という米屋のおやじさんだが「勇士が戦場に於て先登一の名誉を得たかの如く、満面怡悦（よろこび）を湛へて彼方此方へうろうろと駆け回り、足許も忘れし様子なりしが、社員（記者）が呼び留めて住所氏名を聞きし時、漸く我に復（かえ）りて名刺を差出す」興奮ぶり。「市中の車夫は残らず会場指して馳せ向ふかと疑はるる程にて、博覧会

特置の赤帽車夫は凡二千余名あれど、昨日（三月一日）は悉く出切となりたり」。

こんなにも混雑したのは、日曜日だったせいもあるが、この日は偶然、第八回総選挙の投票日とも重なっていた。〝清き一票〟どころではなかったわけだが、ともかくも、翌日には、大阪から十三人の新しい代議士が生まれている。党派別に見ると立憲政友会が九人と圧倒的。この傾向は全国的にも同じで、三百七十五人の新議員中、政友会は百九十三人を占めて圧勝した。ここで、この前後の政情についてふれておこう。

三十一年十一月に成立した第二次山県有朋内閣も、他の藩閥政府同様、政党との取り引きで困難な政局を切り抜けた。それでいて山県は、政党内閣がまた出現した場合、政党員が高級官吏になり、行政の実際にまで手を出すのを封じておこうとした。文官任用令の改正である。高等文官試験のフルイにかけられた専門の学識をもつものが、年功と経験を積み一段一段上にのぼっていく日本官僚制の原則をうちたてたのだ。ついで軍部大臣現役武官制を確立、軍は内閣と議会に対しまったく独立しているという〝軍閥〟の基礎を築いた。文官任用令の改正が、政党に歓迎されるはずはない。これをきっかけに山県内閣と憲政党（旧自由党系）の折り合いが悪くなり、三十三年九月山県内閣は総辞職した。

このころ「一つの内閣が長続きし、安定した政治が行なわれるようにしなければ……」と考えたのは、伊藤博文である。列強の清国での武力対立が、いつ、どんなきっかけで暴発するかもしれない危機感のなかで、日本はまず内を固めておかねば……というわけだ。伊藤は実業家、弁護士など新興ブルジョア階級を基盤とする大政党を考えたが、実際に伊藤のプランにのってきたのは、いつも政府党で

いたいという憲政党だった。政友会は三十三年八月、こうして結成され、第四次伊藤内閣を組織した。しかし、政党員を大臣にするかどうかは天皇の自由意思による、と絶対主義的な原則が強調されており、総裁独裁制による〝勅許〟政党にすぎなかった。

案のじょう、次の桂太郎内閣が三十六年五月の第十八帝国議会で海軍拡張のための地租増徴案を提出したとき、政友会は反対したが、党首の伊藤は元老たちの説得にあうと、さっさと態度をひるがえしてしまう。片岡健吉、林有造、尾崎行雄らかっての民権運動の指導者たちが、政友会を脱会するのはこのときのことである。

こんな政情の中で開かれた勧業博だったが、これが大阪の、いや全国の産業、文化、交通に与えた影響ははかりしれないほど大きい。維新以来の〝世直し〟だった。こんどの万国博はさしずめ〝昭和の世直し〟。谷崎さんは、いまリューマチをわずらい、足が不自由だが「万国博を見るまでは死んでも死にきれない」ときょうもアイデアづくりに〝老いの情熱〟をもやしている。

博覧会うらおもて

—流行語「ハイカラ」—

堺市戎之町東五丁、金蓮寺住職・井上文成さん（七三）は、十歳のとき、裸一貫の両親に連れられ、郷里の兵庫県揖保郡（いまの姫路市）から大阪へきた。郷里で手広くやっていた水車利用の製粉が、明治二十八年からの小麦不作と不況で倒れ、のるかそるかの引っ越しだった。子どもごころに心細かったこともあるが、来阪の日が明治三十六年四月二十日の午前九時ごろだったこと、親子四人が大阪駅構内でマゴマゴした情景を、忘れることができない。第五回内国勧業博覧会の開会式（三月一日から開場していたが式典は四月二十日だった）に出席のため、明治天皇が大阪駅に着かれたのと偶然出会ったからである。

「構内の線路には貨車一台なく、一般の出、改札はとめられていました。われわれは構内の遠く離れたところからお迎えしましたが、おとなの人がきで陛下をおがむこ

イルミネーションに浮かびあがった第五回内国勧業博覧会場の正門

とはできません。百一発の礼砲と軍楽隊の荘重な君が代に〝なんか、たいへんなできごとなんやなあ〟と思ったもんです。両親は〝門出の日に行幸にお会いできた〟とよろこんでいました」という。

一家四人は、南海・難波駅西側を南へはいったわび住居にはいり、博覧会どころでない苦闘をはじめたが、多くの大阪人にとっては維新以来の大がかりな〝物見遊山〟だった。堂島女学校（大手前高校の前身）の三年生だった料亭「花外楼」の女将・徳光コウさん（七八）（東区北浜一の二九）も、学校のテニス友だち三人と茶臼山の池にあるウォーターシュート目当てに出かけた。

「池のはたはものすごい行列で……。十人乗りぐらいの小さなもんで水しぶきを上げて着水したときのスリルが、なんともいえまへなんだ。おたがいにひとのさいふをあてに、なんべん乗ったことでっしゃろ……。そのあとがいけまへん」。場内の店で氷水を飲み、さて勘定となってさいふをのぞくと、四人合わせても足りない。仕方なく手洗いに行くふりをして、エスケープした。「さあ、気になってたまりまへん。罪ほろぼしにと翌日からその氷水屋へ日参しましたが、よう、おなかをこわさなんだもんです」。

おとなたちは、地方館での即売会に気を奪われた。「東京から岩崎小弥太はんの奥さんがきはりましてな。うちの母親がおともして、一週間も人力車で会場通いです。岩崎はんともなれば、買うた名産品を全国に送らんならん。夜は夜会について行くわで、母親はキリキリ舞いをしていました」とコウさん。

入場券は五銭、おまけに金時計の当たる福引きつきだったので、連日押すな押すなの大騒ぎ。正門をくぐった見物人は、いきなり二十二・五メートルもの噴水塔にびっくりし、ズラリと並んだハリボテの西洋館に圧倒された。奥に進むと、美術館わきの池の中央に立つ楊柳大観音に吸い寄せられる。高さ約五メートル、高村光雲が作ったものだ。夜ともなれば、この種の夜間会場では前例のないこころみのイルミネーションで、会場がボーッと浮かび上がり、まるで夢の御殿。正門の「第五回内国勧業博覧会」にも光の文字が流れた。建て物はすべて色電球で総化粧し、噴水は五色の水煙を上げ、見物人を夢見ごこちに誘う。「ハイカラ」が流行語になって大阪中に広がったのも、このときからである。

歩きつかれてノドをカラカラにした見物人たちは、これもまた〝初もの〟のアイスクリーム即売場へ押しかけた。「アイスクリン」――ことばをちぢめてこう呼んだ。口から口へ伝えられ、作るのが間に合わないほどの売れ行きだったが、突然、即売が中止された。あまり人がつめかけたので、会場の通行がマヒしたからだ。それでも六万二百五十一人が「アイスクリン」のトリコになった。

大冷蔵庫も人気を呼ぶ。三百平方メートルというデッカイしろもので、毎日五トンの製氷能力を持ち、魚肉の冷凍、保存と二つの機能をかね備えた文明の利器。五十人ずつがはいって見物もできたが、入れかわり立ちかわり押し寄せる群衆の熱気で、はじめて使ったパイプ式の冷却装置がきかない。四台の大扇風機をフル回転して、空気を冷やす始末。バナナを二十五日間も保存したとき、主婦たちは想像もしなかったできごとにタメ息をもらした。十三か国の商社がきそって出品した機械館では、蒸

気自動車「パンパー号」が、〝初もん食い〟の大阪人に大もて。目ざとい業者が間もなく、バスとして市内を走らせる。

第二会場の堺の水族館では、こんなこともあった。芳川通信大臣の一行の前で、粗末な身なりの老人が水槽に見とれている。小役人があわてて老人に退場を命じたが「わしはちゃんと観覧券を買って、はいったんじゃ」とやり返された。芳川大臣は老人を見ると「やあ、児島君ではないか」。元大審院長・児島惟謙だった。ロシアの皇太子が、日本の巡査に襲われた〝大津事件〟（明治二十四年）のとき、犯人に死刑を迫る政府の圧力に抗し無期懲役を判決、司法権の独立を守った人。「大臣ヅラをして、市民の博覧会を邪魔するな」とやって入場者のかっさいを浴びた。

「白い、うすい絹をつけた西洋の踊り子、カーマン・セラー嬢も若い人の人気者でした」というのは郷土史家・篠崎昌美さん（七四）（西宮市今津野田町二八の二）。「赤、紫、青の照明を使ったんで、そのたんびに衣装の色がかわり〝外人は衣装をかえるのんが早い〟と感心したもんです」。

つらねたてたるやかたには
ちくさの花の香をきそい
海の外よりよせてくる
金銀めのうもうづたかし

〝博覧会音頭〟も高らかに、この勧業博は大阪の近代化にとってまたとないカンフル注射の役目を果たすのである。

ポンポン船

—料金・スピードで人力車圧倒—

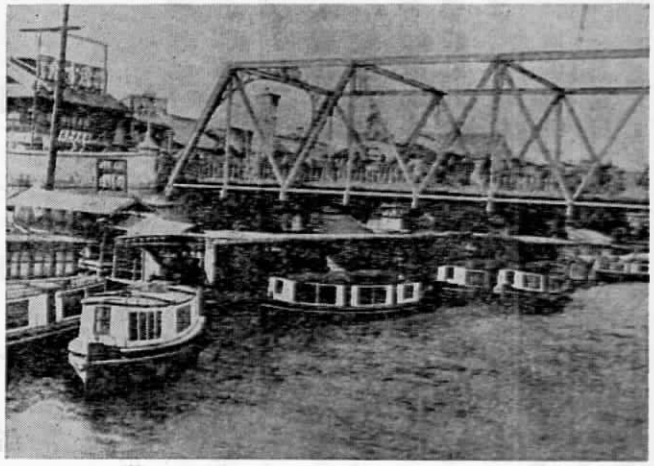
「でけたての巡航船で勧業博見物というのが、楽しみの代名詞でございました。ポンポンポンと威勢よう煙をはき出す発動機の音が、はなやいだ気分をあおりたてましてな」——東区北浜五の三九、古美術商・砂元吉さん（七一）は、かぞえ年九つ、愛日小学校二年生の明治三十六年春を思い出して遠い目をした。父親の磯吉（大正十二年、六十五歳で死亡）に連れられて、西横堀川の船町橋乗降場から乗り込んだという。

「船は長さ五間（九メートル）幅一間半（二・七メートル）ぐらい。上半分は白のペンキ塗りで、屋根のぐるりにピカピカの手すりがついて、そら、きれえでした。窓のうちら側に、せまい板張りの腰掛けがついておりまして、それへ、おいどあてごうて乗りますが、三十人ぐらいでいっぱいになりましたやろ。すわると景色が見えまへんよって、子どもしはみんな立ってます。湊町の住友倉庫のナマコベイが、青い水にゆらいださまが忘れられまへん」。

湊町から先は手こぎの船に乗りかえ、いまは埋め立てられてなくなっている新川—新堀へはいり、恵美須町交差点の一つ北側の辻にあった船着き場で上陸した。「そのとき岸の石垣からニューッと大き

なヘビが出よりましてな。いっぺんに船酔いしました。やっぱりポンポン船やなけりゃと、ますます好きになったもんです」。

川を市民の交通路に利用しようという話は、明治二十九年からあったが、いつも計画倒れに終っていた。明治三十五年五月、鶴原定吉市長は「勧業博観覧者のアシを確保しよう」と、市営蒸気船の運航を市会に提案したが「収支償（つぐな）わず」と否決され「私営業者が、利益の一部を報償として納めるなら許可しよう」ということになった。交通機関が人力車だけではとうてい無理と考えた鶴原は、船場で発明、特許品の普及専売業を営んでいた伊藤喜十郎に相談、伊藤は東京・隅田川に〝一銭蒸気船〟を走らせていた川蒸気会社の経営陣とはかって、明治三十六年一月、資本金十三万円の大阪巡航合資会社をつくった。



天神橋南詰め乗降場に集まった巡航船

やるとなれば、勧業博に間に合わさなければならない。会社は同二月十四日、市側と「運輸総収入の百分の十を市に納める」という報償契約を結んだ。公益事業体と地方自治体との間に結ばれた全国で最初の報償契約である。開業にこぎつけたのは、博覧会の開会から一週間遅れの三月七日。とりあえず六馬力の石油発動機船四隻が、道頓堀の日本橋、戎橋、湊町、西横堀川の新町橋の四乗降場間に蒸気の音をひびかせた。各乗り場から次の乗り場までを一区域として一銭、それ以上一区域ごとに五厘だから全区間が二銭で行けた。例によって米価で換算すると、二十二円になるから、いまの市バスより安い。

〝ポンポン船〟の愛称がついたことでもわかるように、開業当初から一日平均三千二百五十人が乗り、六十三円（約七万一千円）の収入をあげた。その後アメリカに発注していた発動機がつぎつぎ到着、隻数、路線がのびるにしたがって巡航船ブームが大阪をおおった。同年九月には四十一隻が道頓堀、東、西横堀川、大川、土佐堀川、木津川、西道頓堀川に波をけたて、一日平均乗客一万九千六百余人、運賃収入六百五十六円（約七十四万円）をあげる。

夏の夕涼みといえば、それまでは本町橋浜あたりから、小さな乗り合い船で大川へ出たものだが、これもうんと手軽になった。巡航船で難波橋あたりまで行って、剣先をブラついてまた巡航船で帰ってくる。それで往復五、六銭。もてはやされるわけだ。

これを見て憤がいしたのは、人力車の〝かき入れ〟だったが、会期が進むにつれスピード、料金ともくらべものにならない強敵が客を奪いはじめたからだ。彼らにとって巡航船は、呪いの的となった。当時、堂島女学校の三年生だった「花外楼」の徳光コウさんは、博覧会の氷水屋からエスケープした罪ほろぼしに、巡航船でせっせとその氷水屋へ通っていたが「な

んやら車夫の人がこおおて……。もしや船に乗ったとこを見られていて、ひどい目にあうのやないかと、陸にあがってからもしばらくは、人力車夫の顔をよう見なんだもんです」という。形相まさにすさまじかったようだ。

そろそろ水が恋しくなり、したがって巡航船人気が高まった六月十日ごろから、車夫の動きが不穏になった。市内の電信柱には「人力車夫の大集会、十二日午前八時から西区土佐堀青年会館（いまのYMCA）」「同業者の利害休戚（きゅうせき）に関し、一致団結の力を保持せん」などのビラがはり出され、また車夫の間に妙なうわさが流れた。「十二、十三日は車を引くな。商売しているのを仲間に見つかると車をたたきこわされ袋だたきにあうぞ」――。

翌十一日午後六時半ごろには藤原定次郎という三十三歳の車夫が、南区の上大和橋東詰め乗降場に着いた巡航船第六号へ、石油三・六リットル入りのオケを片手におどり込み、客席のイスをこがして放火未遂でつかまった。「おしいことしよった。もうちょっとやのに」――車夫たちは歯ぎしりしてくやしがった。

勧業博さなかだけに、流言のようなことがあるとたいへん。府警察本部はその根拠突きとめに躍起となったが、正体がつかめない。大集会について「営業車夫信用組合創立会」の発起人・向島豊之助は「単に巡航船に対する反抗運動ではありません。車夫の信用組合をつくり、人力車料金を値下げした場合の補償など、現在および将来にわたる便宜をはかろうとするものです」ときっぱりいう。仕方なく各署は管内の帳場の営業者や車夫の親方を呼び寄せ「安心して商売せよ」と警告。十二日は制、

私服警官全員千三百人を動員、終日、車夫取り締まりに当たらせることにしたのだが……。

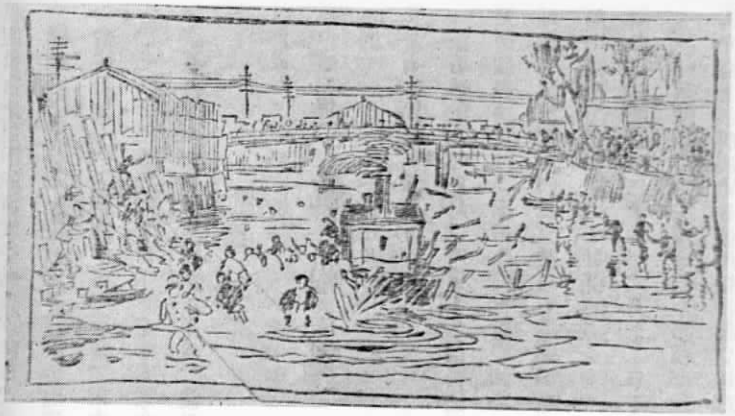
問題の十二日。土佐堀青年会館の周辺は、大会に向かうハッピ、白半股引きの車夫たちで「朝来潮の寄する如く」と新聞が書く騒ぎ。市内人力車夫の約二〇％、三千六百人がこの服装で一堂に集まると、それだけで異様なムードをかもし出す。しかも、流言そのままに、市内には人力車の影すらない。事実上の人力車ストライキは、波乱ぶくみの時をきざんでいった。

巡航船襲撃

―西横堀で血の雨―

演壇の両そでには、府警察本部と西署の警部が、それぞれ巡査一人を従えてニラミをきかせていた。制服警官は会場の入口付近を固め、私服刑事は立すいの余地もない参会者のなかにはいり込んで耳をそばだてていた。彼らも周囲の聴衆と同じくハッピ、半股引きの人力車夫スタイルである。巡航船の登場で、はじめて仲間意識をもった車夫の大集会「営業車夫信用組合設立会」は、こんなふんい気のうちに明治三十六年六月十二日午前九時半から、西区の土佐堀青年会館で開かれた。

「一致団結の力を備え置かざれば、他人の迫害や侵略の厄をこうむるものなり」――座長の河谷正鑑弁護士が朗読する信用組合設立趣意書は、あたりさわりのない内容。過激なものでは設立そのもの



明治36年6月13日付け大阪朝日新聞は車夫の暴動をこうスケッチした
（大阪府立図書館蔵）

が認められない、という配慮があったようだ。ことばのむずかしさもあって車夫たちは、はじめポカンとしていた。ところがその具体的な方法として「巡航船に対する同業者の利害を調査し、自助の方法を講ずること」という決議案が出されたとたん、会場は、が然活気づいた。「巡航船――」という出だしだけで、騒然となったから、巡航船問題ならなんでもよかったのだ。「四十銭のかせぎをほうってきたのは、そのためやぞ――」「しっかり頼むで」の声が飛ぶ。

受けて立った河谷が、人力車の存在意義とはうらはらな車夫の社会的地位をブチはじめたとたん演壇の警部が大声でさけんだ。「公安上、散解ッ」。「その筋の人たちも、牛馬にひとしき扱いをなし……」というくだりが、公安上おもしろくないというのだ。車夫たちは総立ちとなった。肝心の巡航船対策はなにひとつ話し合っていない。口々に警察をののしる声で、会場は大混乱。発起人たちは躍起になってみんなを説得、三千

六百人はブツブツいいながら会場を出たが、やり場のない不満に足は自然と巡航船の走る道頓堀へ向いた。

これよりさき「大会やなんてまどろっこしいことしてられるかい。船とめてまえ」という急進派の別動隊が、西横堀、道頓堀川筋に出没、この朝から警察と追いかけっこしていた。難波桜川町の車夫・紀の房こと内芝房之助にひきいられる数百人だ。午前十一時半ごろ、湊町乗降場へ向かっているとの情報で、かけつけた警官隊はおどろいた。車夫にヤジ馬を加えた約三千人が、大阪鉄道・湊町停車場（いまの国鉄関西線湊町駅）前の深里橋周辺でトキの声をあげ、道頓堀から西横堀川へ北上しようとする巡航船第十二号に投石のまっ最中。警官隊は川に近づけまいと必死になって南へ追い払ったが、ひょいと北を見て色を失った。またまた約三千人の車夫の大群が、肩をいからして川筋をくだってくるではないか。車夫集会の解散組だった。

そのとき、なにも知らずに西横堀川を北からくだってきた巡航船第二号が、同川の南端にかかっている金屋橋の手前七十メートルのところで「プップー」とラッパを鳴らした。湊町乗降場に着く合図だったが、これが巡航船襲撃の合い図となる。

「それ、あれをやっつけろッ」―カワラ、石、棒グイが雨、あられと飛びかい、乗客四十人を満載した巡航船は、あわてて東岸につけようとした。待ってましたとばかり車夫約二十人が河岸で引き抜いたクイを手に船上へおどり込み、入れかわりに乗客は悲鳴をあげて川中へ。乳飲み子を抱いて逃げまどう二人の婦人だけは、車夫たちもさすがにみかねて岸へ助けあげたが、彼等はまるで阿修羅のよ

うに荒れ狂った。

船内を手当りしだいにたたきこわし、逮捕のため船上へはいあがった警官が抜剣すると、丸太ん棒で応戦する勇ましさ。警客を全部川中へたたき込んでしまい、クモの子を散らすように群衆のなかへまぎれ込んだ。

この間に、西横堀川は四つ橋まで、道頓堀は戎橋まで、橋といわず川岸といわず老若男女数万の見物人でぎっしり。身動きもできない人ごみだ。急を聞いて南、西、難波、水上署の応援部隊がかけつけたときは、騒ぎのすんだあとだったが、いっせい検束を開始、見物人のなかからあやしい車夫百五十余人をつかまえた。

この事件後、市内は流言蜚語のウズ。ろうばいした大阪巡航合資会社は、午後零時二十分の便から全面運休した。「休むことは暴力車夫を増長させる」という警察本部の注意で、午後三時から営業を再開したが、乗降場の職員も逃げたままのものが多く、結局この日は無料のデモンストレーション運航。それでも乗り手はなかった。一方、暴動や集会に参加しなかった車夫も、リンチを恐れて車を引くものはなく、事実上のストライキが数日間続く。流血と検束者を出した大阪で初の交通労働争議といえよう。

これで困ったのは勧業博覧会。十二日は梅雨期にめはずらしい好天だったのに、人出はさっぱり。「無人原頭空しく廃宮の墟壁を望むの観あり（中略）万衆の心血を濺（そそ）ぎたる列品は、徒に玻璃函（はりばこ）中に蟄（ひそか）に訪ふ人なきを歎（かこ）ち顔なり」と十三日付けの大阪朝日新聞は書いている。と同時に、大阪人は交通機関の重要性をしみじみと感じた。

さて、巡航船は年を追って全盛となる。明治三十七年には浪速巡航株式会社も発足するが、明治三十九年、大阪巡航がこれを買収、大阪巡航株式会社へ発展。このころには使用船は八十三隻、航路も淀川、堂島川、安治川へも広がり、一日平均乗客は二万千百余人、運賃収入は八百十八円（いまの約九十三万円）に達する。人力車はもはや競争相手にはならず、明治三十六年九月から花園橋―築港間に市電が走りだすが、これもまだチャチなもの。とはいえ、巡航船はやがてその市電によって、とり残されてゆくものの悲哀をなめさせられるのだが……。

巡航船襲撃のあったあたりへ行ってみた。西横堀川は阪神高速道路一号線のささえとなってすでになく、ポンポン船を見おろした金屋橋は高速道路の鉄骨の下でうらぶれていた。もう六十三年前の情景は、しのぶすべもない。